

シリーズ

とき

# 季のことば「春」



「ことば」によって

豊かな四季を楽しむ私たち日本人。

名句や名歌を訪ねながら、

日本文化の豊かさをご紹介します。



# 季ときのことはば春

私たち日本人は、季ときに名前をつけ、豊かな四季を楽しむ術をもっています。季のことはの美しさを感じ、季節のうつろいの中に「ゆとり」をみつけてみませんか。



暦の上の「春」とは、立春(2020年は2月4日)から、立夏(同5月5日)までの間。草木の芽が膨らんで「張る」、土を耕すという意味の「墾る」、天候が「晴る」など、その語源には諸説あります。

一口に「春」といっても「雪解ゆきどけ」や「雪の果て」といった冬の名残を感じる季語から、「山笑う」「春深し」といった、春たけなわといった感のある季語もあり、短い間に里山や庭先の風景が大きく変わる季節です。

現代では「花」と言えば桜のことですが、奈良時代までは梅をさすことばでした。春告草はるつげという別名を持つ梅を皮切りに、桜に菜の花、すみれなどが次々に咲き、土筆つくしや蓬よもぎ、露の臺みきといった山野草が顔を出す。雀の子が生まれ、蛙の合唱が始まる春は、まさに万物が再生する季。晩春に使われる「春の名残」や「行く春」といった季語には、待ち焦がれていた季節が過ぎ去ってしまう寂しさ、春に寄せた人々の格別な思いが感じられます。



菜の花や 月は東に 日は西に

与謝蕪村  
〔季語〕菜の花



## 春のことは

### 雪の果て〔ゆきのはて〕 別名残の雪、忘れ雪

涅槃会(2月15日)のころに降るといわれている、降りじまいの雪。

### 春寒〔はるさむ・しゅんかん〕 別春寒し、寒き春

立春後の寒さをさし、「春」の到来という意識がありながら感じる寒さのこと。

### 春雷〔しゅんらい〕 別虫出しの雷

春に鳴る雷のこと。多くの場合、寒冷前線の通過に伴う。

### 春疾風〔はるはやて〕

春の烈風のこと。冬の西高東低の気圧配置がくずれ、低気圧が東海上に抜けるにもなると荒れた天気となり、ときには嵐となる。

### 山笑う〔やまわらう〕

春の山の明るい感じをいう。草木が芽吹き、花が咲き鳥のさえずる春の山を擬人化したことば。



### 蛙の目借時〔かわずのめかりどき〕

春の暖かさは眠気を誘う。それは蛙が人の目を借りて持っていつてしまうからというユニークな俗説をもとにしたことば。

### 花筏〔はないかた〕

桜の花は散り際も見事。満開の桜が散り、川やお濠などの水面に連なって流れる様子を「筏」に見立てた美しいことば。

### 春霖〔しゅんりん〕 別春の長雨、春霖雨

仲春から晩春にかけて、数日間降り続く雨のこと。長雨とはいえ秋霖と違い明るい感じをもつ。

## 春の名句

春の海 ひねもすのたり のたりかな

与謝蕪村 〔季語〕春の海

手折らるる 人に薫るや 梅の花

加賀千代女 〔季語〕梅

山路来て 何やらゆかし すみれ草

松尾芭蕉 〔季語〕すみれ草

雀の子 そののけそのけ 御馬が通る

小林一茶 〔季語〕雀の子

銭湯で 上野の花の 噂かな

正岡子規 〔季語〕花(桜)

## 春の名歌

石走る垂水の上のさわらびの

萌え出づる春になりになるかも

志貴皇子

かぎろひの 春なりければ木の芽みな

吹き出づる山へ行きゆくわれよ

斎藤茂吉

さくら花 おそしと待ちし世の人を

驚かすまで咲きし今日かな

樋口一葉